支援くんの火災予防奮闘記

～火災を起こさないために～

Vol.8

　拙者は電気が苦手、いや、嫌いなのは先にお話ししておるの？

　目に見えないくせに油断すると「バチッ」と凄い存在感をしめすばかりか、時には火災まで引き起こす厄介な奴よ。

　「君子危うきに近寄らず」という諺があるが、知っておるか？

　君子危うきに近寄らずとは、教養があり徳がある者は、自分の行動を慎むものだから、危険なところには近づかないということじゃ。

　じゃから拙者は電化製品の修理などは一切しないことにしておる。必要な時はご助に命じておけば、事足りるでの。

　ご助には修理させても良いのか、ですと？

　わはははっ、ご助めに教養や徳があると？　中の下の働きしか期待できないご助ですぞ。拙者の代わりに「ビリビリッ」となる位は役立ってもらわないと扶持があわんでしょうが。

「そうだのう、ご助。」

「へい、さようでございますとも旦那様。旦那様、それと壊れておりましたア

イロン、直しておきましたので。」

「おお、直ったか。では武士の身だしなみ、ハンカチのアイロン掛けでもするかの。ご助、スイッチ　オンじゃ。」

「おおぉ、綺麗に延びるのぉ。昭和５７年製でもまだまだ現役じゃのう。おっ、何じゃ？　熱くならないぞ？　それに何だか臭うてきたぞ。のうご助、どこじゃご助。」

拙者の問いかけに応えるように家に入って来たご助。

その腕には赤い防火バケツが・・・

「だ、旦那様っ、コードから火がでておりもうす。御免。」そう言うとご助はアイロンを持った拙者目掛け、防火バケツの水を注いだのでござる。

途端に拙者の全身を青白い光が覆い、同時に激しい痛みが襲ってきたのでござる。

「はあはあ、ご助、おのれは何をしたのぢゃ？」

「へい、母屋の車庫にござりましたセロテープで破れたコードを巻きましてござります。」

「セロテープ？普通、電気コードの修理は絶縁テープぢゃろ？　それに、修理じゃなくてコードを買い替えなさいといったぢゃろうが？　おっ、お金は、持たせたお金は如何した？」

「・・・電気屋には行くには行ったのですが・・・」

「ほい、行って・・どうしたのぢゃ。」

「行きましたら、隣にあるざんしょ。」

「隣にあるざんしょぉ？・・・何が？」

「お隣は福光屋さんざんしょ。」

「おっ、福光屋さんな、あるな・・・あっ、まさかご助っ！」

「福正宗がコードと同じ値段で売っていたんですぅぅぅ・・・」

「何が『ですぅぅぅ・・・』ぢゃ、たわけっ。もう良い、緊急修繕じゃ。絶縁テープを探して来い。絶縁じゃぞ絶縁、今度失敗したらおのれとは絶縁ぢゃ。」

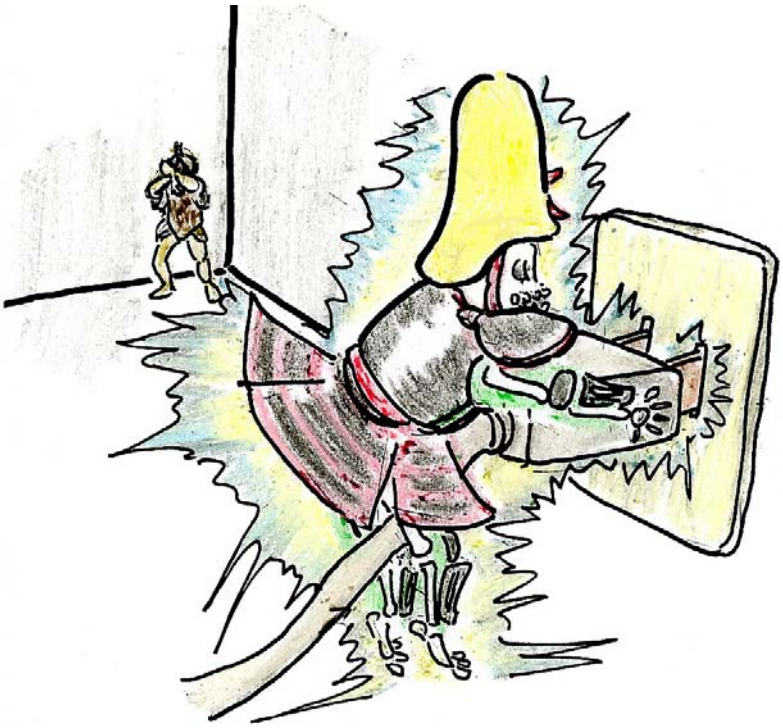
「上手い！旦那様流石ですな。」

「うるさい！さっさと探して来い。」

「絶縁テープで・・これで・・良しと。ご助、コンセントに入れてくれんか。うん？ご助、どうしたそんな隅で。ははあ、反省しておるのか？よしよし、もう少し反省しておれ。コンセントには拙者が入れるでな。」

「あ、あの・・・だ、旦那様・・・」とご助が話しかけるのを聞きながら拙者はアイロンのプラグをコンセントに・・・

「なんぢ・・・」再び拙者の体は青白い光に包まれ、全身に言い表せない程の痛みが走ったのでござる。

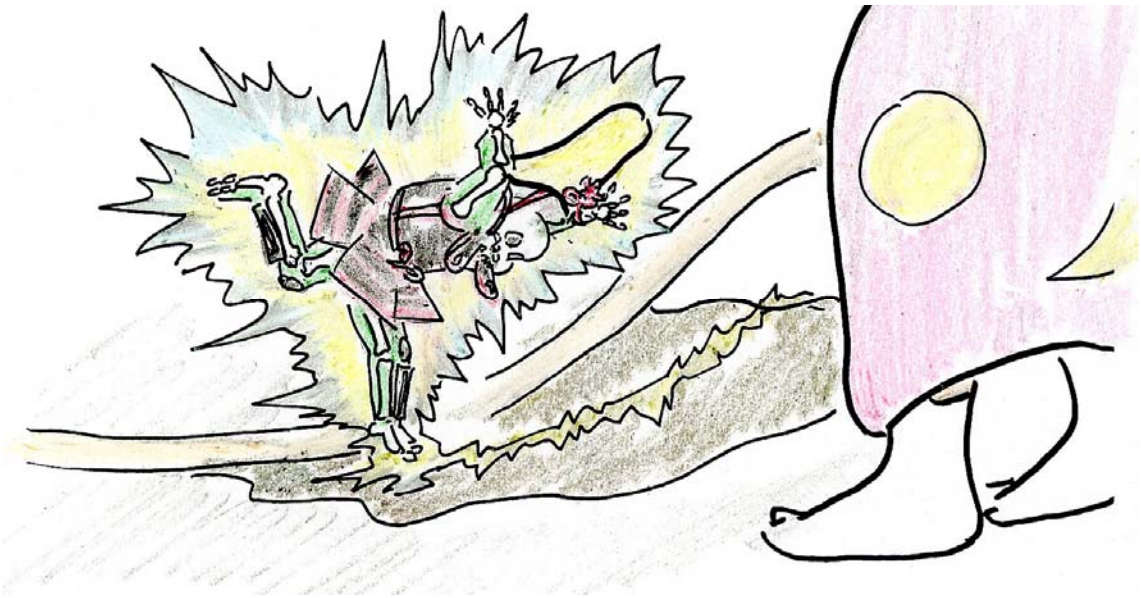


「だ、だから旦那様、濡れた体でプラグを入れたら感電しまっせって言おうとしたのに・・・」

「ご助ぇぇぇ・・おのれはのぉ・・」痛みをこらえ、何とか拙者が立ち上がったところへ

「水かけごっこか？援もする。」と幼稚園から帰った姫様がお見えになったのでござる。

　アイロンコードがコンセントに繋がったままなのを思い出し「姫様、危のうござる。」と一歩踏み出した途端、三度目の電撃が拙者の全身を貫いたのでござる。



「おもちろーい、ちえんの体が光っておるじょ。援も光る！」と近づく姫様を

「入っては駄目じゃ姫様。すっごく、すっごく、お尻ペンペンよりも、痛いんですぞ。」とご助が押しとどめたのでござる。

「ほんとうきゃ？お尻ぺんぺん？」

「はい。何倍も。旦那様のお姿を見なされ。姫様に電気の怖さをお見せしようと、リハーサルも含めるとこれで朝から３度目でさぁ。」

「ふーん、ちょうか電気は便利じゃが正しくちゅかわないと危ないんぢゃな。」

「さようで。濡れた手でプラグを入れるなどもってのほか。水は電気を通しますからな。」

「分かった。」

「それと、プラグの間に埃をためてはなりませぬ。」

「なぜぢゃ？」

「湿気、しっけですよ。たまった埃がしっけをを含むとどうなりますかな？」

「・・・あぁ、埃の中のみずが電気をとおしゅのきゃ？」

「さようで。」

「ふうぅぅん。ぼすけは物知りぢゃの。のうのう、ぼすけ、この穴はにゃぜ（何故)、にゃがい（長い）のとみちかい（短い）のがありゅのぢゃ？」

「・・・へ？」

　ご助が姫の指さすコンセントを見ると確かにプラグを差し込む穴が微妙に違っておった。

「こ、これはぁ・・そのう・・」答えに窮するぼすけ。

「姫様。コンセントの穴のうち、電気は一方にしか流れておりませんのじゃ。もう一方はアース。お電気様のお帰り用の道になっておりまするのじゃ。」と拙者がお教えしたのじゃ。

「ちえん、気がちゅいたのか？」

「はっ、無様なところをお見せし申し訳ござりませぬ。」

「くるしゅうない。では、ちえん、この穴の一つにしか電気はにゃがれていないのか。」

「さようで。」

「どっちじゃ？」

「・・・へ？」

「にゃがい（長い）のとみちかい（短い）ののどっちぢゃ？」

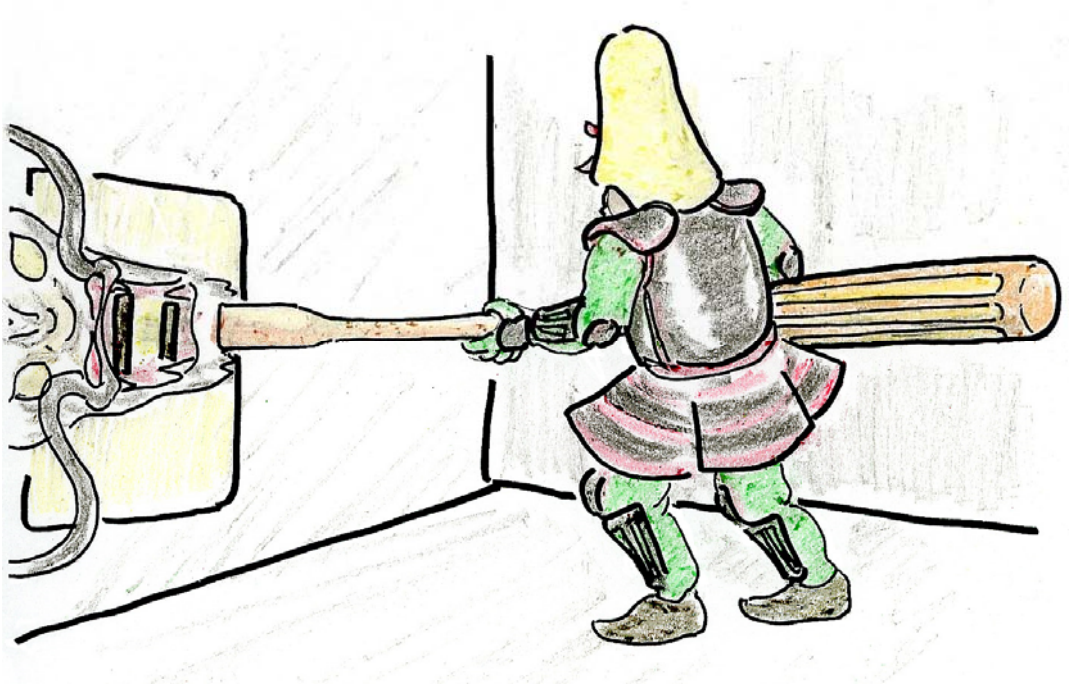
「・・・それは・・」と拙者が返答に窮しておりますと

「旦那様、これを。」とご助がマイナスドライバーを持って参り

「ささ、旦那様。七本槍の利家様の家来、市民家の支援様として存分のお働きを」と続けたのでござる。

「・・・市民家の支援として、ぞ、存分の働きをと言われては致し方無い（意：

しょうがない)。姫様、支援が働きご覧あれ！」と拙者はご助からドライバーを受け取ると、行く手を阻む龍の口のようなコンセントに対峙（たいじ）（意：向き合う）するや、「えいっ」とばかり、短い方の穴を目掛け突き刺しましてござります。



がすっ・・と鈍い音が・・・何も起きませなんだ。拙者の選択は正しかったのじゃ。

「はっはっはぁ、姫様。このとおり短い穴には電気は流れておりま・・」と姫に向き直り説明を始めた拙者に

「旦那様ぁ、落ちたブレーカー戻しますよ。」のご助の声。

そして拙者の体は４度目の青白い光に包まれたのでござる。

「がっ、ががっ、お、お助けを・・を・・」と苦しむ拙者を指さしご助は、

「姫様、旦那様が身をもってお教えしておいでじゃ。あのバチバチと光っておるのが電気のショート。短絡ともうしましてな、火災の原因になりますのじゃ。」

「ちょうか、きれいじゃの。」

「綺麗でも大変に危険なので、古い電化製品や傷ついた電気コードの取り替えを怠ってはいけませんのじゃ。」

などとしたり顔で説明を続け、その説明に「ちょうか、ちょうか」と相槌をうつ姫様。

「姫様。姫様のような高貴なお方は下々のように危ないところへ近づいてはなりませんぞ。」と更に続けられれば、「にゃんでぢゃ？」とお聴きになる姫に「君

子危うきに近寄らず。教養があり徳がある者は、自分の行動を慎み、危険なところには近づかないというたとえでござるよ。」とご助。

「ご、ごすけぇぇぇ・・・お、おのれはぁっ・・」と拙者の叫び声が途切れ、意識を失うのと同時に主家のブレーカーが落ちまして候う。（つづく）